学術奨励賞をいただいて思うこと

片野田 耕太　専門委員

国立がん研究センター　がん対策情報センター　がん統計研究部

私が地域がん登録に初めて触れたのは2005年7月のことです。がん登録の「が」の字も知らなかった自分が、地域がん登録全国協議会の学術奨励賞という名誉ある賞をいただくことになるとは、諸先輩方に対して面映ゆい気持ちがいたします。この10年間はいわゆる「対がん」(第3次対がん総合戦略研究事業)の10年間とほぼ一致しています。その間に「がん対策基本法」が成立し、私の所属である「がん対策情報センター」ができ、昨年にはがん登録の法制化も実現しました。同じ職場に長くいるとマンネリ化しがちかもしれませんが、私の場合はそれなりに変化の多い10年間だったような気がします。

実は、この賞に応募させていただくことを決めてから、一つの迷いが私の頭から離れませんでした。国立がん研究センターに所属する私がこの賞に応募していいものか?という疑問です。ご存知の通り、地域がん登録全国協議会は、事務局が国立がん研究センター内にあります。今年の5月に新しい建物に引っ越してから、事務局の場所は私の机から10mも離れていません。私自身は地域がん登録全国協議会には直接関わっておりませんでしたが、物理的な距離からすれば、自作自演の感は否めないというのが正直な気持ちでした。

「対がん」の10年間で、地域がん登録の標準化と精度向上は飛躍的に進みました。全国がん罹患モニタリング集計に参加する都道府県の数だけで見ても、15程度だったのが40近くに増えました。私自身はデータ活用という形でこの飛躍的な進歩の恩恵にあずかっていたほうですが、「対がん」の10年が終わる節目に立ち会って、そろそろ恩返しをしなければと感じ始めていた、そんな折に伺ったのがこの賞のお話です。

地域がん登録は50年以上の歴史があります。今回賞をいただいた研究では、宮城、山形、福井、大阪、および長崎の5府県のデータを使わせていただき、1980年代からの年次推移の検討を行いました。ほかにも、広島市や愛知県をはじめとして、歴史と実績のある地域がん登録はたくさんあります。私が研究テーマとしてきたことはすべて、これらの地域で培われてきた知恵を受け継いだだけのものです。

一方、地域がん登録を始めて間もない県もあります。地域がん登録全国協議会のウェブサイトを拝見すると、2010年代になってから地域がん登録を開始した県が10以上あります。法制化によって47都道府県のすべてに地域がん登録がそろうと言っても、データやノウハウの蓄積が過去に遡って生まれるわけではありません。産声をあげたばかりの地域は、先達の知恵をたずね、長い時間をかけて自分のものにしてゆかなければなりません。

講演のようす

2016年に予定されている「全国がん登録」の開始で、地域がん登録の精度と情報量はさらに増すでしょう。そこからあがってくるデータの質をどう評価し、どう活用し、どう対策につなげていくか。今後数年間、地域がん登録はその真価を問われることが予想されます。そんな中、私がお役に立てることがもしあるとすれば、歴史ある地域がん登録の知恵を、新しい地域へと伝えていくお手伝いなのかなと思っています。新しい時代を迎えるにあたって、地域がん登録の過去を未来につなげる仕事ができれば、今回いただいた賞の一つの恩返しになるかなと考えております。